建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌［リクシル・アイ］

LIXIL eye

16
JUNE
2018

特集 建築のまちを旅する 04

唐津・壱岐

辰野金吾が生まれ育ったまちで
日本の近代建築の原点を見直す

JUNE 2018
no.16

LIXIL eye

［リクシル・アイ］

表紙の写真

〈旧唐津銀行本店〉
ファサード上部

設計監修｜辰野金吾
設計｜田中 実

日本の建築界の礎を築いた辰野金吾の出身地、佐賀県唐津市。その中心部に現存する「旧唐津銀行本店」の建物は、辰野が監修を務め、教え子の田中実が設計した。いわゆる「辰野式」の特徴が満載の外観デザインにあって注目すべきは、ファサードの上部に2本出ている煙突。目立つ正面になぜ煙突を据えたのか。工学と美術の間で揺れ動いた辰野の人生が、実は垣間見える部分だ

［写真：石田 篤］

左写真

〈旧唐津銀行本店〉
旧営業室の煖炉

装飾的なマントルピースは辰野らしさをよく示し、煖炉のデザインに関して辰野の意向が強く働いたのではないかと思われる。辰野はイギリスに留学中、美術建築家を標榜したウィリアム・バージェスに師事。大きな影響を受け、日本に美術建築の考え方をもち込もうとした

［写真：石田 篤］

LIXIL eye no.16
2018年6月20日発行

発行｜株式会社LIXIL
編集発行人｜早川氏幸
LIXILジャパンカンパニー
TH統括部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3742
制作｜株式会社フリックスタジオ
デザイン｜株式会社ラボラトリーズ
印刷｜竹田印刷株式会社

＊本記事の無断転載を禁じます
＊本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.17は、
2018年10月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/

CONTENTS

特集

04 **建築のまちを旅する｜04**
唐津・壱岐

06 **テーマ1**
辰野金吾が生まれ育ったまちで
日本の近代建築の原点を見直す
ナビゲーター｜**清水重敦**

10 旧唐津銀行本店／旧三菱合資会社唐津支店本館（現・唐津市歴史民俗資料館）

14 **テーマ2**
デザイン・サーヴェイの50年後をたどる
ナビゲーター｜**青井哲人**

18 唐津・壱岐建築めぐり

22 **住宅クロスレビュー｜04**
架構
富永 譲「武蔵新城の住宅」×**福島加津也**「4つの柱」

32 **建築家の〈遺作〉｜01**
前川國男「弘前市斎場」
談｜**松隈 洋**

36 **新世代・事務所訪問｜04**
仲建築設計スタジオ
ナビゲーター｜**門脇耕三**

44 **構造家の新発想｜04**
美しさに隠れた構造原理
満田衛資

48 **触覚デザイン｜01**
村野藤吾のドアハンドル
ナビゲーター｜**笠原一人**

52 **土木のランドスケープ｜04**
木津川遊歩空間「トコトコダンダン」
ナビゲーター・文｜**八馬 智**

58 **Design＋Technique**
ホテル ザ セレスティン銀座
日本橋 榛原

62 **TOPICS**
BIMオブジェクト提供に向けた取組みについて
文｜**岩永鉄平**

65 **INFORMATION**
LIXILからのご案内／展覧会＋イベント／ LIXIL出版 新刊案内

68 **紙上の建築｜04**
次元を横断するということ
豊田啓介（noiz）

特集 建築のまちを旅する 04

唐津・壱岐

玄界灘を挟んで向かい合う佐賀県の唐津と、長崎県の壱岐。
両者はともに建築的に興味深いスポットだ。
150年前の明治維新を機に、急速な近代化を図る新政府は、
西洋列強に追いつくべく工部大学校で建築家の育成を始める。
その第一期の卒業生として世に出た辰野金吾と曾禰達蔵は、ともに唐津の出身。
日本の近代建築界をリードした偉人を2人も輩出した風土の秘密は何か。
そして壱岐では50年前、明治大学の神代研究室がデザイン・サーヴェイを行った。
漁業と生活が一体となったかつてのまちは、どのように変貌したのだろうか。
近代建築と集落コミュニティの原点を見つめる旅へと、さあ出かけてみよう。

「旧唐津銀行本店」の敷地は江戸時代には城の堀で、明治以降に埋め立てられ、前面道路に市電が通っていたこともある。その道は今、「唐津くんち」名物の豪華で巨大な曳山の巡行路だ。「唐津くんち」は唐津神社の秋季例大祭で、毎年11月初旬に開催される。撮影日は、佐賀県が明治維新150年を記念して開催する「肥前さが幕末維新博覧会」の会期初日のオープニングセレモニーにあたり、会期中は唐津サテライト館として利用される「旧唐津銀行本店」前に第八番曳山・金獅子が登場した［写真：石田 篤］

テーマ1

辰野金吾が生まれ育ったまちで日本の近代建築の原点を見直す

取材・文｜長井美暁
写真｜石田 篤（特記以外）

ナビゲーター｜**清水重敦**（京都工芸繊維大学教授）

辰野金吾
たつの・きんご

1854（嘉永7）年、下級藩士の父・姫松倉右衛門と母・おまつの次男として唐津城下に生まれ、1868（明治元）年に父の実弟・辰野宗安の養子となる。姫松家は足軽より低い家格で、屋敷は草葺き屋根だった。生誕地の坊主町には今も、そのころの景観を彷彿とさせる笹の生け垣がわずかに残っている。略歴はp.09参照［所蔵：唐津市］

01｜曾禰達蔵
辰野の親友で、同じく日本における最初期の建築家（1852–1937）。江戸唐津藩邸に生まれる。父は唐津藩士で祐筆（藩主の書記）を務めた。工部大学校造家学科を卒業後は同校助教授、海軍省を経て、三菱社（のちに三菱合資会社に改組）に入社。定年退社後、中條精一郎と曾禰中條建築事務所を開設

02｜村野藤吾
建築家（1891–1984）。唐津に生まれ、10歳ごろから現在の北九州市で育つ。早稲田大学建築学科を卒業後、大阪の渡辺節建築事務所を経て、村野建築事務所を開設

03｜田中 実
「旧唐津銀行本店」の設計者（1885–1949）。竣工時は27歳、辰野は57歳だった。東京帝国大学工科大学で辰野の教えを受け、大学卒業後は清水組（現・清水建設）で優れた意匠力を発揮

辰野金吾は日本の建築界の父ともいえる存在で、その業績は枚挙にいとまがない。日本における最初期の建築家として、日本銀行本店や東京駅をはじめ、生涯に200棟を超える建物を設計した。また、現在の東京大学で多くの後進を育て、日本建築学会の前身である造家学会を設立した。
辰野が生まれ育った唐津に、彼自身の設計となる建物は残念ながら現存しない。しかし、監修を務めた「旧唐津銀行本店」がある。共著『辰野金吾』（ミネルヴァ書房、2015）で新たな辰野像を示した京都工芸繊維大学の清水重敦教授と一緒に唐津を訪ねた。

佐賀県の北西に位置する唐津まで、福岡空港から博多駅を経由する電車に乗って約1時間40分。駅を出て7–8分歩くと、「辰野式」の流れを汲む建物が素朴なまち並みのなかに忽然と現れる。それが「旧唐津銀行本店」だ。

唐津といえば、陶器の「唐津焼」や唐津神社の秋季例大祭「唐津くんち」がすぐに思い浮かぶ。市の人口は現在約12万3千人。県内では佐賀市に次いで多いが、決して大きなまちではない。江戸時代の唐津藩も大藩ではなかったにもかかわらず近代日本を代表する建築家を2人も輩出している。辰野金吾と、工部大学校造家学科（現・東京大学工学部建築学科）で辰野とともに一期生だった曾禰達蔵[01]だ。時代を少し下ると、村野藤吾[02]も唐津で生まれている。なにやら建築に縁の深い土地ではないか。

「辰野式」との違い

「旧唐津銀行本店」が面する道は、「唐津くんち」の巨大な曳山の巡行路だ。近代唐津のメインストリートとなった道であり、城下町内の旧町人地の中で早くから太い道幅が確保された。その道を挟んで向かいに立てば、建物全体を見渡せ、特徴的な外観を一目でとらえることができる。

この建物を設計したのは辰野金吾ではない。辰野は東京駅の設計工事の真っ最中だったため、弟子の田中実[03]に設計を委ね、自身は監督の立場をとった。しかし、外観デザインには辰野の“癖”が満載で、清水重敦教授は「師の故郷の建物であることを田中が相当意識したのでしょう。あるいは辰野が図面に手を入れたのかもしれません」と話す。

それでも、いわゆる「辰野式」との違いはある。一番の違いは「外壁が赤ではなく茶色であること」と「外壁に白い部分が多いこと」だ。

辰野式の特徴を清水教授の解説によりおさらいしておこう。様式は、古典様式をもとにしながら、ゴシック様式の細部形式などを混ぜつつ、独自の変形を加えたもの。イギリスでクイーン・アン[04]あるいはフリー・クラシックと呼ばれる建築様式の一種だ。イギリス本国では古典様式の骨格に垂直性を意識したゴシックの表現を加え、軽やかさや上昇感を生み出しているのに対し、辰野式は左右対称性を意識し、全体に安定感が勝る。

壁面意匠は、赤煉瓦に白色の石をストライプ状に入れ、独特の華やかさを有する。辰野式で最も目につきやすい特徴だが、この表現は19世紀のイギリスで流行し、日本でも辰野以前にすでに用いられていた。しかし、辰野が自らの設計に繰り返し用いたり、柱頭や窓まわりにも白色の石を用いたりして、全体に紅白のツートンカラーの建物という印象を強く与えたため、この表現といえば辰野式と見られるようになった。煉瓦は小口積み（ドイツ積み）だが、これは外部のみの化粧。見えない内部はイギリス積みとし、構造的な強度を確保した。

ボリュームのある隅部の塔屋や、個性的な形状のドームや屋根によって形成される賑やかなスカイラインにも特徴がある。古典様式の美学とは対極に位置する、不規則性や変化に特質をもつ「ピクチャレスク」と呼ばれる表現手法で、「辰野のイギリス留学時代の師である建築家のウィリアム・バージェス[05]の作風に通じるものがあります」と清水教授は語る。

さて、「旧唐津銀行本店」の外壁が茶色なのは、煉瓦調タイルを貼っているからだ。清水教授は「赤煉瓦をそのまま使った辰野との大きな相違点ですが、辰野式の発展形ともいえます。小口煉瓦をタイルに置き換えたわけですから」という。タイルは備前伊部（岡山県）で製造されたものだが、その色合いは陶芸のまち・唐津のイメージによく似合う。

また、白い部分の多さも辰野式にないもので、清水教授は「田中の建築家としての主張が込められている」と見て、次の仮説を披露する。

「白い部分だけを取り出すと、3連アーチと1連アーチの箱状になり、イタリア・フィレンツェの〈ロッジア・ディ・ランツィ〉を想起させます。市民が集まったり儀式が催されたりするときに使われ、市民自治のまちを象徴する建造物です。田中はそのイメージを、唐津で一番の銀行建築に秘かに投影したのではないか、と考えることはできませんか？」

煙突が好き？

左右対称のファサードを見上げると、屋根から煙突が突き出ている。「この建物はとにかく煙突が多い。正面に2本、側面に3本、裏にも」と清水教授。「煙突3本は大げさに思えますが、似たようなスケッチを辰野はたくさん残しています」。辰野の欧州留学時代のスケッチブックを見ると、煙突の割合が非常に多いという。「ひたすら煙突を描いています。有名な建物でも、なぜか煙突しか描いていない（笑）」。

辰野は煙突とともに煖炉もスケッチした。煖炉は当時の西洋の建物に欠かせない設備だ。「日本にも煖炉を取り入れるなら、きちんと使えるものとするために煙突が必要だと、辰野は煖炉と煙突をセットで考えていたのかもしれません」。しかし、辰野は帰国後、それほど多くの煙突をデザインしていないから、「ここは珍しい。しかも一番目立つ正面にあり、あえて突き出させているようにも見える。田中が逆らえなかったのかな。ちょっと不思議ですよね」。

建物の内部は、入ってすぐが待ち合いロビーで、上は吹き抜けになっている。道路側の壁には煖炉が2つあり、その上の出っ張った壁の中に煙突が隠れている。これはファサード中央で縦に伸びる白い壁と表裏の関係で、「外観に表れているものと内部が対応しています」と清水教授。

煖炉はカウンターの向こうの旧営業室にも2つ設置されている。ロビーは吹き抜けのため暖まりにくく、来訪者がドアを開けるたびに暖気が逃げて冷気が入ってくるとはいえ、ここは九州。ファサードに煙突を露出させてまで、ロビーにも煖炉が必要だったのだろうか。

ロビーの煖炉のマントルピースは円をモチーフにしたデザインで、「東京駅や北九州の西日本工業倶楽部洋館など、辰野作品によく見られます。やはり辰野がディテールに手を入れた可能性は高い」。辰野作品の煖炉が総じて装飾的なのは「バージェスの影響」と清水教授は話す。「バージェスがデザインした煖炉はくどさの極致。空白恐怖症かと思うくらい、隙間なく装飾で埋め尽くす。彼は中世志向ですが、そんなごてごてした煖炉は中世にありません。理想の中世を思い描き、煖炉や柱頭で特にそれを実現しようとしたのです」。

美術建築をもち込もうとした

辰野が留学していた当時のイギリスは、中世礼賛の思潮からゴシック・リバイバルが全盛だった。その思潮は手仕事の賞賛に結びつき、「建築も、人の手がつくり出す精度の高い美術的な装飾により、濃密な空間になると思われていました」。これが「美術建築」のあり方で、バージェスは当時を代表する建築家であり、自らを「美術建築家」と標榜していた。

清水教授は「辰野は美術建築を日本にもち込もうとした」と考えている。「造家学会（現・日本建築学会）の講演で、『美術は建築に応用されざるべからず』と話した史料が見つかっています」。美術建築は建築家ひとりの手になるものではなく、画家や彫刻家との協働が必要だ。しかし、日本では製作者が限られる。「辰野が煖炉のデザインに力を入れたのは、日本で美術建築を具現化できるものが煖炉だけだったからでしょう。ゆえに辰野作品の見どころはどれも、外観と、内部では煖炉です」。

外観の大きな塔屋は金庫室に対応していた。「どこに金庫があるか、外からわかってしまう。辰野らしくないな」と清水教授。「辰野は日本銀行本店を設計するときに欧米の銀行建築を数々視察し、計画面を特に勉強しました。金庫をどこに置くか、そこに至る動線や防犯をどうするか、明治時代の建物は通り一遍な計画が多いなか、日本銀行はよく考えられています。辰野は機能とディテールと施工方法を考えるのが得意な工学の人なんです」。

一方、辰野作品はデザインのアクが強く、プロポー

上｜「旧唐津銀行本店」の内部
中｜同南西側の外観
下｜昭和30年ごろの銀行前の通り。周辺の木造家屋は2階建てのため、銀行がすっくと目立つ［所蔵：唐津市教育委員会］

04｜クイーン・アン様式
19世紀後期にイギリスの建築家リチャード・ノーマン・ショーが、中世末期および近世初期の民家様式を復興してつくり上げた建築様式。中世風の凹凸の多い構成、ハーフ・ティンバー様式、シングル壁、張り出し窓、チューダー式煙突、煉瓦壁など、イギリス人の好む伝統様式の要素を巧みに利用。ショーは自らの作風を、古典様式を崩した「フリー・クラシック」とも称した

05｜ウィリアム・バージェス
19世紀のイギリスを代表する建築家（1827–1881）。代表作の「カーディフ城」は、石炭の輸出で富を得た第3代ビュート侯爵がバージェスを招いてつくらせたもので、当代一流の画家や彫刻家が装飾を手がけた

06｜耐恒寮
1871（明治4）年、唐津藩知事となった小笠原長国が開設した洋学校。東京から英語教師として高橋是清を月給100円で招聘。ちなみに知事の月給は30円だった。財政難のため1年3カ月で閉鎖されたが、辰野や曾禰、実業家の大島小太郎、経済学者で早稲田大学第2代学長の天野為之らを輩出。当初の開設地跡には現在、石碑と説明板が立つ

旧唐津銀行本店にて辰野の設計思想について語る清水重敦教授［写真：編集室］

07｜高橋是清

官僚、政治家（1854–1936）。第20代内閣総理大臣。滞米中は騙されて奴隷同然の生活を強いられ、苦労しながら英語力を身につけた。耐恒寮には東太郎と名を変えて赴任。のちに日本銀行本店新設工事の建設事務主任として辰野と協働した

08｜大島小太郎

実業家（1859–1947）。耐恒寮から東京の二松学舎で学び、唐津に帰郷。地元経済界の指導者として佐賀銀行の前身である唐津銀行を1885（明治18）年に創立し、初代頭取に就任。また、道路や鉄道の敷設、唐津港の整備、市街地の電化などに尽力し、地域産業の振興と郷土の近代化に大きな足跡を残した

09｜工部省工学寮

1873（明治6）年に開校。明治政府は富国強兵・産業立国を目指して工部省を設け、そのなかに工学の専門教育機関として工学寮を設立。1877（明治10）年に廃止され、工部大学校と改称。1885（明治18）年には工部省も廃止され、工部大学校は文部省に移り、翌年、工部大学校と東京大学工芸学部が総合して帝国大学工科大学となった

10｜ジョサイア・コンドル

イギリスの建築家（1852–1920）。ロンドン大学とサウス・ケンジントン美術学校で建築を学び、ウィリアム・バージェスのもとで設計実務を経験。工部大学校の造家学教師として招聘され、1877（明治10）年に25歳で来日。辰野とは2歳違いだった。工部省との契約終了後も日本に残り、建築事務所を開設して数々の建物を設計。日本で一生を終えた

11｜唐津尋常高等小学校

1902（明治35）年に竣工。辰野は曾禰の助言を受けつつ設計。外観意匠は一部に和風が混じるが、基本的には明治期の小学校建築によく見られる木造洋風建築。規模の大きさ、機能的な配置、女子教室への配慮、夏の暑さをしのぐため南側に廊下を設けるなど、平面計画に辰野の設計の核心があった。1958（昭和33）年に閉校し、その跡地に市庁舎が建設された

［個人蔵。寄託：唐津市教育委員会］

ションも悪いという評価が一般的だ。清水教授は「辰野は絵が得意ではありませんでした。建築の絵は図面的に描くからまだしも、人物や彫像の絵はからきし、だった」と話す。しかし、極端に美術肌の建築家に師事してしまった。バージェスから、人物画を描くことに努めれば、美術建築がどういうものかを理解できる、と熱心に忠告され、人物画を学ぶために夜間の画学校にも通っている。

辰野は努力して美術的な能力を身につけようとした。「その限界が作品にところどころ表れてくるのが愛らしい」と清水教授は語る。

欧州で建築観を形成

辰野は1854（嘉永7）年、唐津藩の下級藩士だった姫松倉右衛門の次男として唐津城下に生まれ、1868（明治元）年に父の実弟である辰野宗安の養子となった。数え9歳から勉学を始め、武士が一般的に身につける素養を修得し、1870（明治3）年に唐津藩が開設した洋学校「耐恒寮（たいこうりょう）[06]」に1期生として入校。この学校で、英語教師として招聘された同い年の高橋是清[07]、生涯にわたって支え合う仲となる曾禰、唐津銀行を創立する大島小太郎[08]などと出会う。

辰野と曾禰は1873（明治6）年、工部省工学寮（のちの工部大学校）[09]に、ここでも1期生として入校。生徒募集はあまり知られていなかったが、2人は高橋から情報を得て試験を受けたと見られている。

同校は6年制で、予科2年を終えたあと、工学の各分野に分かれて専門教育を受ける。辰野は造船学を志していたが、開校当初は造船学の専門科がなかったため、造船学の講義が含まれていた機械学を志望。しかし、教師と反りが合わず、機械学以外に6科あるなかで、造家学に転じた。

造家学には当初、専任教師が置かれていなかった。イギリス人建築家のジョサイア・コンドル[10]が着任したのは辰野が専門科に進んだ1年以上あとだ。機械学以外に6科あるなかで、辰野が造家学を選んだ理由は見出しにくく、清水教授は「入りやすい学科を選んだ、というだけかもしれません」と推測する。

辰野は入校時の成績こそ最下位だったが、在校中がむしゃらに勉学に励み、造家学を首席で卒業。各学科の首席卒業者は、お雇い外国人教師に代わって教授となることを目的に欧州への官費留学を命ぜられ、辰野もそのひとりとなった。

工部大学校で辰野が学んだ造家は、いかに堅牢な建物をつくるかという工学的な側面にかなり偏っていた。「コンドルがもち込んだ芸術的な側面にも、当時の辰野はそれほど傾倒していなかったと思われます」と清水教授。

そんな青年辰野にとって、1880（明治13）年から3年間に及ぶ欧州留学は大きな転機となった。イギリスで2年、ロンドン大学と王立芸術院で建築学を修める一方、施工会社や設計事務所で実務経験を積んだ。その後、1年かけてフランスとイタリアを巡り、歴史的なものから最新のものまでさまざまな建物を見学した。これらの経験は辰野の建築観を形成するうえで本質的なものとなった。

なかでも辰野が最も強い影響を受けたのが、バージェス事務所での経験だった。バージェスは辰野のイギリスでの修学開始から7カ月後に亡くなったが、清水教授は「辰野のその後の建築にかかわる思想のほぼすべてにバージェスの影が見えます」と話す。

帰国後の辰野は予定通り、1884（明治17）年にコンドルの後任として工部大学校教授に就任。後進を育てる一方、建築事務所を開設し、建築家としての活動も並行させた。また、造家学会を創設するなど、日本の建築界の基盤づくりに全力を注いだ。

唐津の石炭産業の興隆

辰野は建築家としての活動に集中するために、1902（明治35）年に大学を依願退官した。故郷で唯一、自ら設計した「唐津尋常高等小学校[11]」はこの年に竣工。残された図面を見ると、小学校建築の最新の考え方を導入した工夫のある平面計画で、ここからも辰野が機能の人だったことがうかがえる。

曾禰が設計した「唐津公会堂[12]」も今は影も形もないが、設計に関与したとされる「旧三菱合資会社唐津支店本館（現・唐津市歴史民俗資料館）」が唐津港にある。設計したのは保岡勝也[13]で、曾禰は当時、三菱の建築顧問だった。「旧唐津銀行本店」から車で10分ほど。行ってみよう。

到着後、建物の外側をぐるりと見るなり、清水教授が「なんとも不思議なデザイン。入母屋造りが非常に特徴的で、海側はそれにベランダが付いて、東南アジア風のコロニアル様式に見えます。何がデザインソースだったのでしょうね？　石炭の海外輸出に関係するのかな」と首をかしげる。

唐津市教育委員会・生涯学習文化財課の岩尾峯希氏によると、この建物から海の向こうに見える高島はかつて貯炭場で、唐津港は石炭の積出港だった。唐津炭田は幕末から明治の初めにかけて、石炭の産出量が全国シェアの3割を占めるほどだったという。

幕末の唐津は社会の荒波に翻弄された。最後の藩主・小笠原長国[14]の世嗣だった小笠原長行（ながみち）[15]は、徳川幕府最後の老中で、第二次長州征伐では九州方面の幕府軍総督を務めた。幕府軍の敗退後も長行は譜代の家臣として幕府に忠誠を尽くすが、大政奉還後、唐津藩が新政府軍の征伐対象となったため、長国は長行との養子関係を義絶して降伏。新政府に石炭を献上して許しを得た。

「九州内の諸藩のなかでは、後発ではありますが、微妙な立場となった唐津では洋学校をつくり、人材育成に力を入れます」。唐津からなぜ傑人が続々登場したのか、という清水教授の疑問に答えて、岩尾氏が語る。

唐津の石炭は海外にも輸出され、唐津港には外国船がよく往来した。耐恒寮の生徒たちは高橋に習っている英語が本当に通じるのか不安だったが、外国船の船員と英語で話したら、きちんと通じて安心したというエピソードがあるという。「やっぱりこの建物は海外に顔を向けていますね」と納得した表情の清水教授。「あえてやらないと、このようなデザインにはならないと思いますから」。

石炭産業の興隆は明治期以降の唐津に多大な経済効果をもたらした。この建物は、炭鉱王・高取伊好（たかとりこれよし）の邸宅である「旧高取邸」（p.20参照）などとともにその歴史を今に伝えている。

工学と美術の間での苦闘

早くから石炭が基幹産業だった唐津で、辰野は近代化の動きを肌で感じていたに違いない。「だから工学で身を立てる決意を固めた。それが日本の建築界の始まりに歴然とあることを、唐津では再確認できる気がします」。

清水教授はまた、「旧唐津銀行本店は辰野自身の設計ではありませんが、辰野色が濃いことを今回実感しました。工学と美術の本質での一体化を目指した辰野の、最も気骨となる部分が素直に表れている。他のどの辰野作品よりも実は辰野らしい建物かもしれません」とも語る。

揺籃期の日本の建築界において、辰野は美術建築の思想をもち込むことで、工学と美術の間を切り開き、正面から対峙しようとした。しかし、自身の設計では充分に実現することができず、思いを託した弟子たちはその概念を狭めて捉えた。そして、弟子たちが活躍した明治後期の建築界では、工学的側面、特に建築構造を重視する動きが盛んになり、工学と美術の間に亀裂が生じた。辰野はこれを埋めようと苦闘したが、「建築界は辰野の意図したものとは異なる方向に進み、工学と美術は本質的には決して交わらず、今に至ります。唐津は日本の建築界が抱え続ける問題を考えるうえで重要な場所ですね」と清水教授。

辰野は近代化が進む東京で、国家の経済の中心となる建物（日本銀行本店）、国家の表玄関となる建物（東京駅）、国家の政治を司る建物（国会議事堂）を設計することに終生意欲を燃やした。うちふたつは叶えたのだから本望だろうと思いきや、辰野家には金吾が残した「建築家にはなるな」という言葉が家訓として伝わるという。日本の建築界の父の一生が格闘と苦悩に満ちたものだったことが、この言葉にも凝縮されている。

辰野金吾 略歴

1854（嘉永7）年
下級武士の父・姫松倉右衛門と母・おまつの次男として唐津城下に生まれる
1868（明治元）年
父の実弟である辰野宗安の養子となる
1870（明治3）年
唐津藩が開設した洋学校「耐恒寮」に入学
1873（明治6）年
工部省工学寮に入学
1879（明治12）年
工部大学校造家学科を首席で卒業。翌年より欧州留学
1883（明治16）年
帰国。工部省御用掛に奉職、営繕課に勤務
1884（明治17）年
コンドルの後任として工部大学校教授に就任
1885（明治18）年
処女作「銀行集会所」竣工
1886（明治19）年
帝国大学工科大学教授に奉職する一方、辰野建築事務所を開設。造家学会（現・日本建築学会）を創設、副会長となる
1888（明治21）年
日本銀行の設計者に決まり、銀行建築等の調査のため1年間の欧米出張
1889（明治22）年
明治美術会に入会し、評議員となる。欧米出張より帰国。日本銀行に設計図面を提出
1896（明治29）年
「日本銀行本店」竣工
1898（明治31）年
建築学会会長に就任。東京帝国大学工科大学学長に就任
1902（明治35）年
大学を依願退官。大阪に出張事務所を開設。「唐津尋常高等小学校」竣工
1903（明治36）年
葛西萬司と辰野葛西建築事務所を東京に開設。「日本銀行大阪支店」竣工
1905（明治38）年
片岡安と辰野片岡建築事務所を大阪に開設。「東京火災保険会社」竣工
1906（明治39）年
「第一銀行京都支店（現・みずほ銀行京都中央支店（復元））」「日本銀行京都支店（現・京都文化博物館別館）」竣工
1907（明治40）年
「浜寺停車場（現・浜寺公園駅）」竣工
1909（明治42）年
「奈良ホテル」「日本生命九州支店（現・福岡市赤煉瓦文化館）」竣工
1911（明治44）年
「盛岡銀行（現・岩手銀行赤レンガ館）」竣工
1912（明治45／大正元）年
「朝鮮銀行」「日本銀行小樽支店（現・日本銀行旧小樽支店金融資料館）」「松本健次郎邸（現・西日本工業倶楽部洋館）」竣工
1913（大正2）年
「潮湯別館（現・南天苑）」「二十三銀行（現・大分銀行赤レンガ館）」竣工
1914（大正3）年
「中央停車場（現・東京駅）」竣工
1915（大正4）年
「武雄温泉楼門・新館」竣工
1918（大正7）年
「大阪市中央公会堂」竣工
1919（大正8）年
東京赤坂の自宅で逝去。享年66

12｜唐津公会堂

1913（大正2）年に竣工。現在の唐津保健福祉事務所のあたりに立っていた。正面の塔屋屋根や右側の切妻屋根のアーチなどは優美なデザインで、曾禰らしさが表れている［所蔵：唐津市教育委員会］

13｜保岡勝也

建築家（1877–1942）。東京帝国大学工科大学で辰野に学び、卒業後は三菱合資会社に入社。曾禰のもとで丸の内赤煉瓦街の設計に携わり、曾禰の定年退社後は技師長に就任。1912（明治45）年に退社し、翌年、自身の建築事務所を開設。埼玉県川越市での一連の仕事が評価されている

14｜小笠原長国

唐津藩を治めた小笠原家の5代当主（1812–1877）。先代藩主の長和が急逝したため、信濃の松平家から養子に入り、家督を継いだ

15｜小笠原長行

江戸末期の幕府老中（1822–1891）。小笠原家初代長昌の長男として生まれ、5代長国の養子となる。曾禰は長行公の小姓として幕末を迎えて帰藩した

清水重敦　しみず・しげあつ
京都工芸繊維大学教授／1971年東京都生まれ。1993年東京大学工学部建築学科卒業。1999年同大学大学院博士課程単位取得退学。2005年同大学で博士（工学）の学位を取得。独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所景観研究室長を経て、2012年京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科准教授。2017年より京都工芸繊維大学デザイン・建築学系教授。

長井美暁　ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

MAP 3
24

旧唐津銀行本店

1912年

設計監修｜辰野金吾　設計｜田中 実

辰野らしさのなかに
田中のセンスが光る師弟共作

唐津銀行は唐津藩の洋学校「耐恒寮」で辰野金吾と同級生だった大島小太郎が発足させた。初代頭取に就任した大島は本店の設計を辰野に依頼したが、辰野は東京駅の設計工事中だったため、東京帝国大学の教え子である田中実の手に委ねた。銀行として1997（平成9）年まで使われ、同年、唐津市に寄贈された。

外観はいくつもの様式を折衷させ、他の辰野作品に負けず劣らずごてごてしく賑やかだ。「まったく交わらないデザインを重ね合わせているよう」と清水教授。しかし、田中のセンスが感じられる部分がある。出入口部分のペディメント（切妻屋根の妻側の三角形部分）とコラム（円柱）はプロポーションがいい。窓のデザインは「半円の一番内側にVが入ることで、少しアール・デコ風。モダンデザインの感覚が見られる」という。また、屋根手前の両側隅部の塔屋は小さく、やや遠慮気味ですっきりしている。「辰野自身が設計していたら、もっと重苦しいものになっていたと思う。弟子たちは先生に敬意を払いながら、いかにかっこいいデザインを実現するか、皆考えていたのでしょう」。

外壁の茶色部分は煉瓦調タイル貼りで、タイルは当時、最新の建築材料だった。このタイルは備前伊部（岡山県）の煉瓦製造会社が製造。田中が設計し、1912（明治45）年に竣工した「大同生命福岡支社」の旧社屋にも同じタイルが使われている。白い部分は御影石、ベージュの横縞部分は擬石。屋根の中央部に2本突き出ているのは煙突で、その真下の1階内部に煖炉があり、外観の意匠と内部の機能が対応する。

1

1 周囲にドライエリアを設けた明治期の典型的な煉瓦造の建物。塔部には鉄製の棟飾りが施され、正面には左右対称に銅板葺きの尖塔がのる。王冠のように飾り立てられた尖塔は「辰野式」の特徴だ。出入口の柱はイオニア式
2 旧営業室。コリント式の柱が2階の床を支え、ロビーとの仕切りとなるケヤキの木製カウンターには美しい飾り格子が設けられている。「明治40年代から様式建築のディテールが崩れ始め、ここも比較的忠実ななかに少しモダニズム化が見られます」と清水教授
3 コリント式柱の石膏やケヤキの内側には構造材の鉄骨が隠れている
4 ロビーに2つある煖炉のマントルピースはいずれも同じデザイン。円をモチーフにしたデザインは東京駅や北九州の西日本工業倶楽部洋館にも見られることから、清水教授は「辰野がディテールに手を入れた可能性は高い」と語る。辰野はバージェスの教えで、詳細図を原寸大で描くことを重視していたという
5 旧重役室の煖炉のマントルピース。煖炉は石炭を燃料としていた

2

3

4

5

MAP 2
08

旧三菱合資会社唐津支店本館

現・唐津市歴史民俗資料館

1908年

建築顧問｜曾禰達蔵　設計｜保岡勝也

石炭産業で発展した
唐津の歴史を今に伝える

唐津港が唐津炭田の積出港として発展したことに伴い、石炭の輸出などを手がけた三菱合資会社の唐津出張所として、海岸の埋立地に建てられた。設計者の保岡勝也は、1906（明治39）年に三菱を定年退社した曾禰達蔵の後任として、29歳で技師長に就任。曾禰は退社後、三菱の建築顧問を務めた。

正面外観は「明治40年前後の木造学校建築とほぼ同じ。木造の骨組みを露出させたハーフ・ティンバー様式で、縦のラインが強調されているので、アメリカのスティック・スタイルと見ていい」と清水教授。海に面しては1階、2階ともベランダが付き、清水教授いわく、ベトナムなどに見られる「東南アジア風のコロニアル様式」。唐津港は国の特別輸出港として外国船もよく往来していたことから、このようなデザインになったと推測される。

三菱が手放したあとは海上保安庁の庁舎になり、屋根の飾りを撤去するなど大きく改造された。1978（昭和53）年に市の重要文化財に指定され、翌年の修復工事で正面側を復元。1980（昭和55）年に県の重要文化財に指定された。曾禰が設計した長崎の「占勝閣」との類似性を指摘する声もあるが、曾禰がこの建物の設計にどこまで関与したかは資料が残っていない。現在は休館中だが、年1回、特別公開される（2018年は11月の予定）。

1 明治末から大正期に撮られた写真。建設当時、近隣の人々はこの建物を「三菱御殿」と称したと伝わる［所蔵：唐津市教育委員会］
2 入母屋造りで東南アジア風のコロニアル様式が目を引く。日本にあるコロニアル様式の建物は寄棟造りが多いが、ベトナムでは入母屋造りがよく見られるそうで、『『ホーチミン記念館』に似ている」と清水教授
3 2階の庶務課室。床は縁甲板張り、壁は木摺下地の上に漆喰塗り、打ち上げ天井、上げ下げ窓の仕様
4 ベランダ柱の基礎は花崗岩叩き仕上げ。1階ベランダから直接海側に出られる階段が設けてあり、来航した客人をここで出迎えたという
5 建物の基礎は赤煉瓦積み、その上に花崗岩叩き仕上げの竿石がある。大屋根は入母屋造りで、正面に大破風、その両側は千鳥破風。大破風の後ろに風見鶏の付く塔屋根もある。正面外観のデザインはハーフ・ティンバー様式で、下見板張りの外壁は一部、漆喰塗り。清水教授は「曾禰が設計した唐津公会堂と比べると、この建物はデザインの密度が薄い」と話す

1

2

3

4

5

テーマ2

デザイン・サーヴェイの50年後をたどる

ナビゲーター｜青井哲人（明治大学教授）

取材・文｜磯 達雄
写真｜小松正樹（特記以外）

1960年代の後半から1970年代のはじめにかけて、日本各地の集落でデザイン・サーヴェイが盛んに行われた。唐津とフェリーの航路で結ばれている壱岐の勝本浦には、明治大学・神代雄一郎の研究室が訪れている。その跡をたどって、漁村を歩く。デザイン・サーヴェイから50年、神代が見た集落はどのように変わっているだろうか。

唐津東港からフェリーに乗って、1時間45分で壱岐へ着く。ここは日本と大陸を結ぶ海上交通の要所として古代から栄えた島。魏志倭人伝にも「一支国」として載っている。

印通寺の港で船を降りて、そこからは車で30分、北へ向かって走る。目指すのは勝本浦。そこはかつて、明治大学の神代研究室がデザイン・サーヴェイを行った集落だ。

デザイン・サーヴェイとは、建築や都市のデザインを考えるために集落の景観や構造を実地に調べ、図化する運動のこと。1965年に実施されたオレゴン大学による金沢・幸町を皮切りに、1960年代後半から1970年代前半にかけて、日本各地の古いまち並みが残る集落を、各大学のチームが訪れて調査した。なかでも建築評論家の神代雄一郎が明治大学の教授として研究室を率いて実施した瀬戸内・女木島、丹後・伊根、志摩・菅島、足摺・沖の島、津軽・十三などの調査は、建築専門誌にも発表され、注目を集めた。壱岐・勝本浦もその調査地のひとつだった。

神代研究室によるデザイン・サーヴェイの成果は、同じ明治大学の青井哲人教授が受け継いで、アーカイブ化を進めている。神代のデザイン・サーヴェイから50年が経ち、集落の何が変わらず、何が変わったのか。そんな関心をもって、青井氏は調査地を順次、巡っているという。2015年には勝本浦も訪れた。

海際から消えた イカを干す「たな」

勝本浦は入り江を囲んだ漁村だ。集落は海岸線と山裾に挟まれる格好で、細長くうねりながら帯状に延びていく。神功皇后を祀った聖母宮という神社へと至る中央の道の両側に、平入り2階建ての家が軒を接して並んでいる。

「Googleの空撮写真を見ると、神代研究室が描いた屋根伏図の様子とあまり変わっていない。よく残っているなと思った。でも実際に行ってみると、集落にはさまざまな変化があった」と青井氏。

大きく変わったのは、中央の道から見て裏の方だ。山側は土留めのコンクリート壁で覆われ、そして海側には新しく幅の広い道が通っている。それにより「たな」と呼ばれる、水面に張り出した竹製のテラスが消えた。かつては、各住戸に漁船が着き、獲ってきたイカをそこで干していた。職住が一体化した漁村の光景は、今では見られなくなってしまった。自動車の往来も、海岸の道を通じて主に行われている。

しかし、それによって中央の道側は、かつての趣きが残ったとも考えられる。建物はすでに多くがアルミサッシや窯業系サイディングで覆われているが、よく見るとガラスの内側に木製の手すりが見えたり、特徴的な彫り物が施された軒裏の持送りが残っていたりする。これらは神代のサーヴェイにも写真が載っていたものであり、かつての雰囲気を十分に感じさせるものになっている。そうした痕跡を探しながら、勝本浦を歩くのは楽しい。

「でも神代先生の文章は、そうした建物のディテールにまったく触れていない。まち並み景観の美しさや記号論的な分析に、彼は興味を向けていなかった」と青井氏。では何を求めて神代は、デザイン・サーヴェイに取り組んだのだろうか。

海岸線に沿って延びる勝本浦集落の全体を、丘の上から見下ろす。屋根が連なる様子は、デザイン・サーヴェイが行われたころとそれほど変わっていない印象だが、海側は船だまりができるなど、大きな工事が行われている

1

2

3

4

5

6

7

8

9

4　神功皇后を祀った聖母宮は、勝本浦の総鎮守で、奈良時代初期に建立されたとされる

5　中央を貫く通りの両側に2階建ての家が建ち並ぶ

6　たなが並んでいた海岸線には道路が通り、海と住戸は切り離された

7　「モカジャバカフェ大久保本店」。大正9年以前に海産物問屋として建てられた建物を改装し、飲食店として営業。問屋時代の屋号を店名に冠している。道沿いの建物壁面に取り付けられた折りたたみ式の椅子「ばんこ」が見られる。建物は、長崎県のまちづくり景観資産に登録されている

8　各家の軒を支える持送りには見事な彫刻が施されている

9　建物の2階には異なるデザインの木製手すりがあり、道を歩く人の目を楽しませていた。現在、外側に手すりが現れている家は少ないが、目をこらすとガラスの内側に手すりが見えたりもする

1　神代研究室のデザイン・サーヴェイで撮られた1969年の勝本浦の様子。各住戸に直接、漁船が着くようになっていた［明治大学神代雄一郎研究室／明大建築アーカイブス蔵］

2　住戸の海側に張り出した竹製のテラスでは、漁で穫られたイカが干された［明治大学神代雄一郎研究室／明大建築アーカイブス蔵］

3　勝本浦の屋根状図。神代研究室のメンバーを中心とする20人がのべ13日間滞在し、各戸を実測して描いたもの［明治大学神代雄一郎研究室／明大建築アーカイブス蔵、写真：吉田和生］

民主主義の基盤は適正規模のコミュニティそのあり方を神代は探っていた

神代の意識が向いていた先は、全体としての集落の秩序だった。勝本浦が本浦、正村、黒瀬という3つのコミュニティから成ることを指摘し、海岸線に沿って日常的な移動に用いられるヨコ方向の軸と、お祭りのときに顕在化する海から山へと貫くタテ方向の軸が、集落の型を形成していると見る。

そしてこうした問題意識のもととなっていたのは、当時の日本社会と、そこで活動している建築家たちへの危機感だった。

「高度経済成長のもと、開発主義でどんどん巨大な建築が建っていく。それに抵抗する力が地域のコミュニティにはない。それは民主主義が本当の意味では育っていないことの証左なのではないか。日本が求めるべき民主主義社会の基盤は、適正な規模と形態をもったコミュニティなのではないか。そのあり方のヒントを、神代先生はデザイン・サーヴェイで探ろうとしたのだと思う」。

神代はコミュニティの適正規模を200戸、1,000人と見定め、それをもとにして現代の建築や都市もつくっていくべきだと考えていた。その意味で彼がデザイン・サーヴェイで目指したのは、歴史をもとにしたまち並み保存でもなければ、民族学的な分析でもない。集落の意匠論なのだ、と青井氏は見る。意匠論とは、時代を貫いて見出される、かたちの規範の探求である。

1970年代になって神代は、都市に次々と現れてくる超高層ビルなどの巨大建築を、適正なコミュニティの規模から逸脱するものとして批判する（「巨大建築に抗議する」、『新建築』1974年9月号）。ところが、これが組織設計事務所に属する建築家たちから激しく反論され、またアトリエ派の建築家からもほとんど擁護されなかったことから、以後、神代は筆を折るような格好で建築評論から身を引いてしまう。

けれども彼が持論とした集落の意匠論や、そのもととなったデザイン・サーヴェイにおける考察は今も十分、振り返るに足るものではないか。かつて神代研究室が描いた図面やもとのかたちを変えながらも構造を残した勝本浦のまちを歩きながら、そんなことが思われた。

青井哲人　あおい・あきひと
明治大学理工学部教授／1970年生まれ。1992年京都大学工学部建築学科卒業、1995年京都大学大学院工学研究科博士課程中退。神戸芸術工科大学助手、人間環境大学助教授を経て現職。建築史・建築論。著書に『植民地神社と帝国日本』（吉川弘文館、2005）、『彰化一九〇六年』（編集出版組織体アセテート、2007）、『明治神宮以前・以後』（共著、鹿島出版界、2015）ほか。

磯 達雄　いそ・たつお
建築ジャーナリスト／1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988–1999年日経アーキテクチュア編集部に勤務。2002年よりフリックスタジオ共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

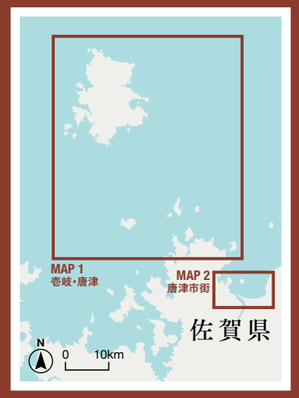
唐津・壱岐建築めぐり

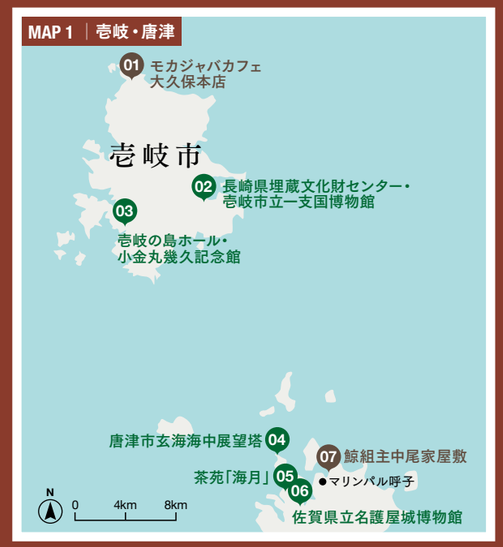
KARATSU / IKI

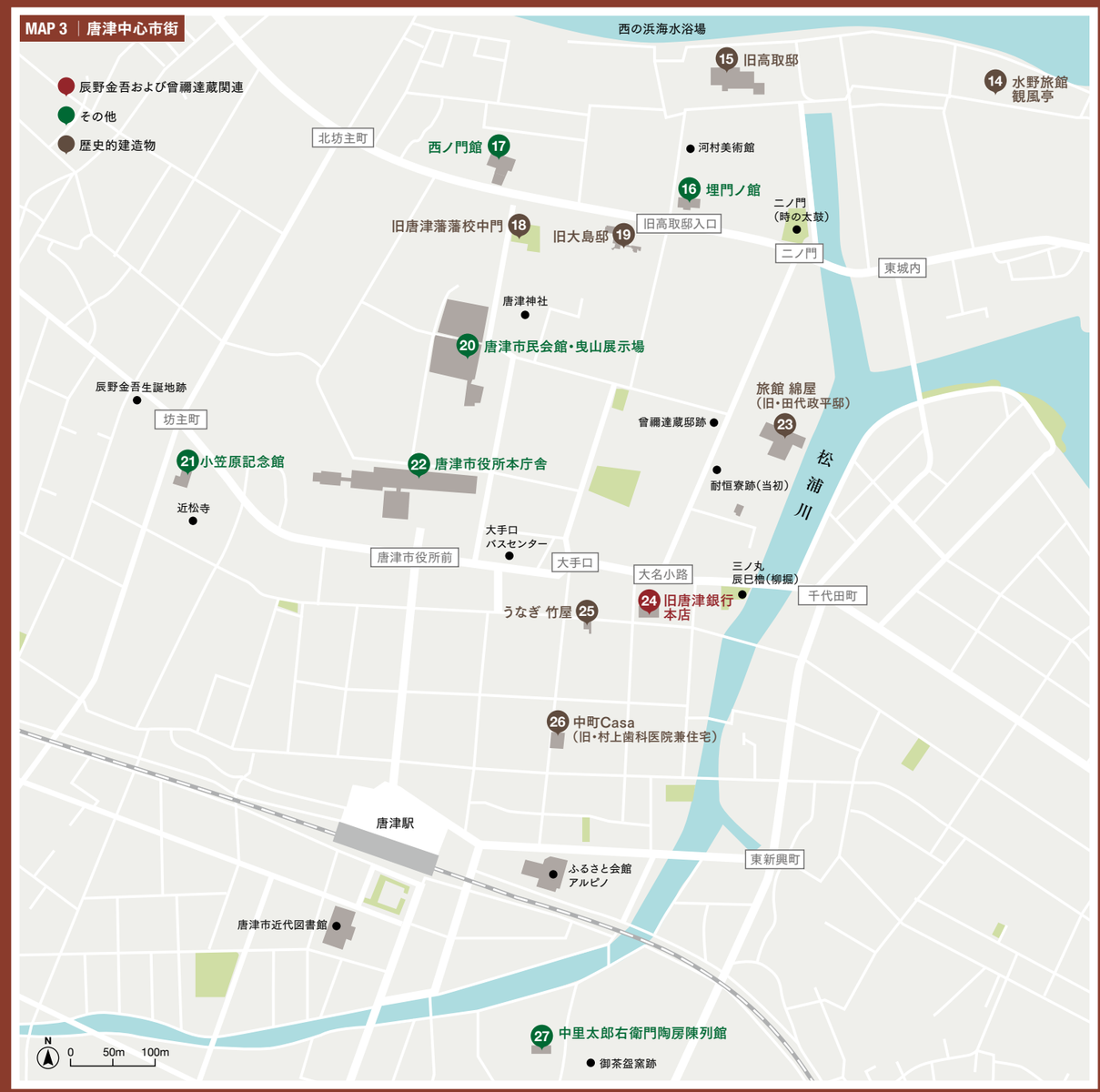
佐賀県北部の都市である唐津は、唐津焼と呼ばれる陶器や、曳山がまちを練り歩く「唐津くんち」の祭で広く知られる。古代から開けた土地で、魏志倭人伝に記された末盧（まつら）国はこのあたりと推定されており、また豊臣秀吉の朝鮮出兵に際して大規模な城が築かれるなど、日本史の重要な舞台となってきた。市内には江戸から昭和の初めまで、各時代の雰囲気を残す建物が多数現存し、なかにはリノベーションされて飲食系の施設として開放されているものもある。ゆかりの深い有名建築家には、本特集で解説したとおり、辰野金吾と曾禰達蔵がいるが、もうひとり、宇部市渡辺翁記念会館や日生劇場を設計した村野藤吾も唐津の生まれ。残念ながら市内に設計した作品はないが、設計顧問としてかかわったとされる建物が存在する。

玄界灘を挟んで位置する壱岐は、唐津や博多と航路で結ばれている。この島も、日本と大陸を結ぶ海上交通の要所として早くから栄えたところで、島内には国の特別史跡である原の辻遺跡をはじめとして、数多くの遺跡や古墳が残る。こうした壱岐の歴史を一堂に展示する壱岐市立一支国博物館が2010年にオープン。黒川紀章の死後に完成した遺作とも呼ぶべき建築だ。

写真｜小松正樹（特記以外）







01 ▶p.17参照

モカジャバカフェ大久保本店
設計｜不詳
竣工｜1920年以前
壱岐市勝本町勝本浦359

02

長崎県埋蔵文化財センター・壱岐市立一支国博物館
設計｜黒川紀章建築都市設計事務所
竣工｜2009年
壱岐市芦辺町深江鶴亀触515–1
国特別史跡 原の辻遺跡を見晴らす丘の上に建設された、壱岐の歴史を通史で学べる博物館。黒川紀章の遺作であり、フリーハンドのスケッチをもとに緩やかな曲面からなる建物形状を起こしたという。埋蔵文化財センターを併設し、収蔵庫や整理室をガラス張りにして来場者に公開している

03

壱岐の島ホール・小金丸幾久記念館
設計｜宗本順三＋ラウムアソシエイツ、那の津壽建築研究所
竣工｜1996年（ホール）、2002年（美術館）
壱岐市郷ノ浦町本村触468
芸術文化の拠点として建てられた公共施設。中庭を介して2つの棟が向かい合い、1,025席の大ホール、平土間約460㎡の中ホール、大中小の会議室群を備える。併設されたコンクリート打ち放しの小金丸幾久記念館は、壱岐出身で東京大学の建築学科で講師も務めた彫刻家・小金丸幾久が寄贈した彫刻作品が展示されている

04

唐津市玄海海中展望塔
設計｜清家 清
竣工｜1974年
唐津市鎮西町波戸1628–1
波戸岬の先にそびえる高さ20mの塔。陸地から海上へと突き出た86mの桟橋を渡って、塔の内部へ。階段で下りて行くと、水深7mの海中展望室からは、色とりどりの熱帯魚が遊泳する海中の景色を楽しむことができる。周辺の海域は日本で最初に海中公園として整備された

05

茶苑「海月」
設計｜吉村順三設計事務所
竣工｜1994年
唐津市鎮西町名護屋3458
国の特別史跡となっている名護屋城跡に近接して建てられた茶室。八女杉、唐津の土、伊万里の手すき和紙など、九州産の材料が多用されている。大寄せの茶会ができる茶屋棟と、4畳半と8畳の間からなる茶室棟で構成。茶屋棟から庭を眺めながら抹茶と和菓子を楽しむことができる

06

佐賀県立名護屋城博物館
設計｜前川建築設計事務所+おがた建築設計室
竣工｜1993年
唐津市鎮西町名護屋1931–3
文禄、慶長の役に際して豊臣秀吉が築いた特別史跡名護屋城跡に近接して建てられた博物館。かつてあった壮大な城の様子や日本列島と朝鮮半島との交流の歴史を展示。日韓友好の意味を込めて、外壁には韓国産のこぶし出し仕上げ御影石と有田で焼いた磁器質打込みタイルが使われている

07

鯨組主中尾家屋敷
設計｜不詳
竣工｜18世紀前–中期（主屋）
唐津市呼子町呼子3750–3
江戸時代に捕鯨業を営み、鯨組主として巨万の富を築いた中尾家の屋敷。2008年に復原工事が始まり、2011年より一般公開。吹き抜けをもつ「通り」と呼ばれる広い土間や巨大な柱や梁、また建築時期の異なる2棟の建物が一体化された痕跡を見ることができる。佐賀県の重要文化財

08
▶p.12参照

旧三菱合資会社唐津支店本館（現・唐津市歴史民俗資料館）
建築顧問｜曾禰達蔵
設計｜保岡勝也
竣工｜1908年
唐津市海岸通7181

09
末盧館（まつろかん）
設計｜アルセッド建築研究所
竣工｜1990年
唐津市菜畑3359–2
日本最古の稲作跡が確認された「菜畑遺跡」を顕彰する歴史博物館。古代の高床式倉庫をイメージして設計された。館内には、遺跡から出土した炭化米や石庖丁、農具、家畜として飼われていたブタの骨などの貴重な資料が展示されている

10
唐津城
天守閣設計｜藤岡通夫
天守閣完成｜1967年
唐津市東城内8–1
豊臣秀吉の家臣だった寺沢志摩守広高が築いた城で、名護屋城の解体資材が使われたと伝わる。城から東西に延びる松原が翼を広げた鶴の姿に似ていることから、舞鶴城とも称された。天守閣は鉄筋コンクリート造による模擬天守

11
洋々閣
設計｜不詳
改修設計｜柿沼守利、永井敬二
竣工｜1912年（本館）
改修｜1988年～継続
唐津市東唐津2–4–40

創業1893（明治26）年の老舗旅館。通りに面した千本格子、石畳、枯山水に配された樹齢200年の黒松など、純和風のしつらえが目を引く。建物の維持管理のために建築家・柿沼守利とデザイナー・永井敬二による部分改修が継続的に行われており、両者が改修したギャラリーには唐津焼の第一人者・中里隆と息子・太亀、娘・花子の作品が並ぶ

12
唐津市文化体育館
設計｜佐藤武夫設計事務所
竣工｜1981年
唐津市和多田大土井1–1
唐津城にも近い周辺の環境を意識して、入母屋の屋根を架けた大小2棟が並ぶ構成。内部には体育館のほか柔剣道場、弓道場、文化ホールなどの機能を収める。1階を石積みの基壇として扱い、2階レベルにペデストリアンデッキを設けて、アプローチ広場としている

13
浜玉市民センター
設計｜光吉健次
竣工｜1959年
唐津市浜玉町浜崎1445–1
九州大学の建築学科で教鞭を執っていた建築家、光吉健次による設計。浜崎玉島町役場として建てられた建物で、2階に一般事務室、3階に議場を収めていた。1階の大半はピロティとして開放されていたが、改築によって内部化。現在、建て替えの計画が進められている

14
水野旅館 観風亭
設計｜不詳
観風亭竣工｜1938年（昭和46年ごろおよび昭和50年代に改修）
門竣工｜江戸末期（推定。1973年移築）
唐津市東城内4–50

唐津湾を目の前にのぞむ老舗旅館。1938（昭和13）年に紙問屋の別荘として建てられ、1953（昭和28）年より旅館として営業。敷地の一部が直接海岸とつながる好立地を活かし、座敷棟は床を高くあげ、広縁をとっている。門は、唐津藩小笠原家の家老を務めた堀家屋敷の門を移築したもので、名護屋城の部材を利用したという伝承がある。観風亭、門ともに国の登録有形文化財

15
旧高取邸
設計｜不詳
竣工｜1905年
唐津市北城内5–40

肥前の炭鉱王として知られる高取伊好の邸宅。約2,300坪といわれる敷地に、客人を迎える大広間棟と家族が住む居室棟の2棟が建つ。座敷には能舞台がしつらえられ、大理石の煖炉、部屋ごとに趣向を凝らした杉戸絵や欄間など、和洋折衷の意匠をもつ。一時は取り壊しの危機に直面したが、大規模な修復・耐震工事を経て、2007年から一般公開されている。国指定重要文化財［写真：石田 篤］

16
埋門ノ館
設計｜設計集団櫂
竣工｜1995年
唐津市北城内6–56
市のまちづくり事業にて、茶道、華道、能楽など芸事の練習場所として設計された施設。建物は、漆喰壁の木造真壁造り。長屋門をもつ武家屋敷をイメージした外観が目を引く。館内には舞台がしつらえられており、市民の利用も多いという

17
西ノ門館
設計｜設計集団櫂
竣工｜1994年
改修｜2015年
唐津市北城内1–8
唐津城下、三の丸の西側の出入り口「西ノ門」にちなんで名付けられた、出土文化財の管理・展示および唐津くんちの「曳山」の修理・展示室の入る施設。まちなみの景観を考慮した蔵造りの外観に対して、内部は将来、多用途に利用されることを想定し、大スパン1ルーム構成となっている

18
旧唐津藩藩校中門
設計｜不詳
竣工｜1801年
唐津市西城内4–43
唐津藩時代の建造物がほとんど残っていないなか、現存する唐津藩ゆかりの江戸時代の門。水野藩藩校の中門として建築され、のちに唐津小笠原藩に引き継がれた。門の表側には小笠原候の紋が入った鬼瓦があり、裏側には水野候の紋が入っている。1992年に市に寄贈され、現在の場所に移築。市指定重要文化財

19
旧大島邸
設計｜不詳
竣工｜1893年ごろ（母屋）
復原｜2017年
唐津市南城内4–23

唐津銀行の初代頭取を務め、鉄道敷設や港湾整備など唐津の近代化をリードした大島小太郎の邸宅。旧高取邸と同じ棟梁が建てたとされる。大規模な木造平屋の和風住宅には、名所絵や人物画を多く残す長谷川雪塘による襖絵が残る。解体予定だったが、市民の保存運動により、現在の地に移築・復原が実現した

20
唐津市民会館・曳山展示場
設計最高顧問｜村野藤吾
設計｜山下寿郎設計事務所
竣工｜1970年
唐津市西城内6–33

ホールや会議室、ユネスコの無形文化遺産であり、県の文化財である曳山の展示場を有する総合文化施設。当時の市長の願いを受け、唐津出身の村野藤吾が設計最高顧問につき、落成式には来賓や市民代表およそ1,500人が参列した記録が残る。村野の「会館から唐津城が見えるよう途中に高い建物をつくらないように」という助言が守られてきた

21
小笠原記念館
設計｜今井兼次
竣工｜1956年
唐津市西寺町511–1
近松寺境内

旧藩主小笠原家をはじめ、郷土の偉人たちの記念品などを展示。資料保存を考慮した高床構造となっており、2階建てに見えるが実は平屋建て。内部の2層吹き抜け空間のオーバーハングした展示ケースや、アングル鋼材の窓格子など、モダンな手法と和風の意匠が組み合わされている

22
唐津市役所本庁舎
設計｜岡田・的場設計事務所
竣工｜1962年
唐津市西城内1–1
窯業が盛んな地域であることを反映して、内外装にはタイルが積極的に用いられている。紹介された建築雑誌の記事では、評論家の浜口隆一によって地方建築家による優れた公共建築の例として高く評価された。老朽化のため、現在、建て替え工事が始まっている

23
旅館 綿屋（旧・田代政平邸）
設計｜不詳
竣工｜1905年
唐津市大名小路5–10
1905年に建てられた炭鉱主・田代政平の別荘を、料亭綿屋が譲り受け、改装して旅館とした建物。木造3階建てという規模の大きさ、積層する大屋根や御影石の布基礎の上に建てられた洋館などに、炭鉱王の威勢が感じられる。本館およびモールディングの折り上げ天井をもつ洋館ともに国の登録有形文化財

24
▶p.10参照

旧唐津銀行本店
設計監修｜辰野金吾
設計｜田中 実
竣工｜1912年
唐津市本町1513–15

25
うなぎ 竹屋
設計｜不詳
竣工｜1923年
唐津市中町1884–2
旧唐津銀行本店の近くに構える老舗の料理店。木造3階建ての建物は、1階が調理場と住居、2階と3階が客室として使われている。内部はマツやトチの大板、紫檀や黒檀など、銘木をふんだんに用いたぜいたくな空間。国の登録有形文化財

26
中町Casa
（旧・村上歯科医院兼住宅）
設計｜不詳
竣工｜1933年
改修｜2013年
唐津市中町1868
商店街の中に位置する歯科医院として人々に親しまれた下見板張りの建物。市に寄贈後、外観を活かしたリノベーションが行われ、現在は1階がカフェレストラン、2階がコミュニティスペースとなっている。国の登録有形文化財

27
中里太郎右衛門陶房陳列館
設計｜佐伯正人＋木村 弘
竣工｜1961年（陳列館）、1967年（新館）
唐津市町田3–6–29
唐津焼の名工が制作する工房に接して設けられた、展示・販売のための施設。白壁の建物の上に方形の瓦屋根が載り、深い軒の裏には扇垂木が現れている。新館と合わせて、内部では作家の作品と窯の商品を展示・販売している